

平成28年度地域開放事業（子ども開放事業） 「おいでよ！森のがっこうへ」（大学の森をたんけんしよう！）

事業代表者 農学部附属演習林・飯塚 和也

構 成 員 農学部森林科学科 教授 田坂聡明、農学部附属演習林・教授 飯塚和也、講師 大島潤一

1. 事業の目的・意義

子供たちの遊びの変化や都市近郊林の減少などにより、森林等の自然とふれあう機会も減少している。様々な森林に関わる体験を提供することにより、生活に必要な不可欠である森林および木材の価値を再評価させ、大学の有する施設・設備と教職員のノウハウを活用し、学びの機会を提供する。

2. 事業内容

(1) 林業機械操作体験

普段、生活の中で目にすることのない林業機械（フォワーダ（クローラ、キャタピラ）、プロセッサという林業機械の操作を体験させる。家などの建物の材料となる木材がどのように作られているのか、木材となる樹木をどのように育てているのかなど、森林等に関する話をしながら、実際に操作体験をさせて、森林や林業への興味関心を持つように体験させた。



図1. 林業機械操作体験（プロセッサ）

(2) 木工体験

演習林の間伐材（スギ）等を利用してノコギリやカナヅチ等を使い自力で作成する。

創意工夫することが学べるように器具の使い方など最小限の指導に努め、子ども達の自主性に任せるよう実施した。



図2. 木工体験（参加者の作品）

(3) キャンプファイアー

塩谷町ジュニアリーダー（中学生）指導の下、炎を囲んで行った。その中で歌い、踊り、笑い、楽しむ活動は感性豊かな子ども達の心を開き、共に感動を味わう絶好の機会であった。



図3. キャンプファイヤの様子

(4) 丸太切り、川遊び

演習林材(ヒノキ)をノコギリで切り落とし、様々な絵柄の焼印を押して思い出の品として製作した。



図4. 丸太切りの様子

3. 事業の進捗状況

7月27日から28日の1泊2日のスケジュールで附属船生演習林において開催した。

県内はじめ茨城県の小学生2～6年生25名が参加した。

4. 事業の成果

参加した子ども達は、本事業により日常では接することのない演習林の施設・設備等を通し自然と触れ合うことにより、普段、意識せず使用している木材の成り立ちや林業に興味・関心をもち、木材を供給する森林の管理を知り、それには様々な森林技術や機械の存在があることを理解し、日常生活で触れている森林の恵みの背景を知ることができた。

また、本事業においては塩谷町の協力の下で、ジュニアリーダー(中学生)の派遣を受け、各ジュニアリーダーも子供達と触れ合うことにより自らと違った視点からの発想などを受けることに大きな意義を見出していた。

5. 今後の展望

現在、附属演習林において行っている様々な

教育・研究活動のうち、林業を体系的に学べる施設・設備が備わっているのは他大学では類を見ない。これらの施設設備と豊かな自然を生かし、現代では都市部のみならず町村部においても都会的生活しか体験していない子ども達に、自然や林業を体験学習する機会を提供し地域に貢献することで見識を広げる効果があった。

また、毎年参加している子どもも少なくないため、体験学習の内容についてもより充実させると共に子ども達にとって魅了有る体験を企画、実施させていくよう努めるものとした。